

令和6年度第1回葉山町総合計画審議会議事録

日 時：令和6年4月22日（月）14：00～16：15

場 所：葉山町役場庁舎3階 議会協議会室1

出席者：臼井会長、近藤委員、高梨委員、加藤委員、福安委員、早川委員、富樫委員、伊藤委員、
町田政策財政部長、佐野政策課長、大屋主任、山田主任

欠席者：陸永委員

開 会

○事務局（大屋主任）

皆さんこんにちは。お忙しいところお集まりいただきまして、また本日天気の良い中、ご足労おかけいたしました。誠にありがとうございます。

定刻になりましたので、これより令和6年度第1回葉山町総合計画審議会を開催させていただきます。委員の皆様におかれましては、この度は審議会委員を快くお引き受けくださり、また、2年間どうぞお付き合いいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。委嘱状につきましては机上にてお配りさせていただきましたので、ご確認をよろしくお願いいたします。本日は委員改選後初めての審議会となりますので、会長が決まるまでの間は、事務局の方で司会を務めさせていただきます。

それではまず本日の資料の確認を先にさせていただきます。

《資料の確認》

《委員・事務局の自己紹介》

《会議の成立について報告》

1 会長の互選

○事務局（大屋主任）

議題の方に入らせていただきまして、議題の（1）、会長の互選でございます。

お配りしております参考資料の1をご覧ください。こちらは葉山町総合計画審議会規則の第4条第1項に、審議会に会長を置き、委員の互選により定めると規定されております。会長を決めさせていただきたいと思いますが、どなたかお願いできますでしょうか。ご意見あれば承りたいと思います。

○委員（高梨麻美）

以前よりご指導いただいております臼井先生にぜひ、継続してやっていただきたいなと思っております。

○事務局（大屋主任）

それでは、臼井委員にお願いしたいと思います。臼井会長から一言お願いします。

○会長（臼井正樹）

はからずもではないんですが、引き続きご指名いただきました臼井です。どうぞよろしくお願いします。

もう、大分長くなっているので、ご指名ということで、やりかけの事でもありますので計画を作る
ところまではお付き合いさせていただければと思いますのでよろしくお願いします。

今日も忌憚のないご意見を皆さんからいただけることを期待しています。

どうぞよろしくお願いします。

○事務局（大屋主任）

ありがとうございます。

会長も決まりましたのでここからは、臼井会長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○会長（臼井正樹）

それでは私の方から、進行させていただければと思います。

具体的な議題に入る前に、当審議会の公開非公開について皆様にお諮りしたいと思います。

事務局の方からご説明をよろしくお願いします。

《原則、公開として決定》

《傍聴者2名の入室》

2 第五次葉山町総合計画の策定について

○会長（臼井正樹）

総合計画骨子案について事務局の方からご説明をお願いします。

《事務局より説明》

○会長（臼井正樹）

24 ページ、資料の資料2の24 ページまで、今駆け足でご説明をいただきました。ここまでのところ
で、何かご意見なり或いはわかりにくいところに対してのご質問がありましたら、お願いしたいと思
います。

○委員（近藤大輔）

御説明ありがとうございます。これまでもいろんな意見を付してきて、基本構想のところ、
非常に組立てをつくり直して分かりやすくなったんじゃないかなと、僕は個人的な感想を持ちま
した。

少し意見というか、意見を交わしたいのが、基本計画の部分で新たな項目立てがされていると
ころがありますよね。その中の基本計画の3つの柱の項目が「健幸」、「楽校」、「共動」と来て、楽
校は「全ての町民がわくわくする楽しい学校」で「楽校」というこの造語というかこの言葉は分か
るんですけども、3つ目の「共動」のところ、共に動くと言わんとしている意味は分かる、何と

なく分かるんだけど、何だろう、「協働」というほうがしっくり来るのではないかなと。これは造語ということなので、ちょっと個人の主観も入ってしまうんですけど、にんべんの「協働」はよくある言葉というか、なじみ深いのかな。ちょっと感覚的なことなのかもしれないんだけど、何かそこら辺、あえて「動く」にしたあたりのお考えをお聞かせいただけたらと存じます。

○事務局（佐野政策課長）

今、近藤委員からありがたい御指摘を頂いたんですけど、「協働」、もう大分世間に浸透している「協力して働く」という言葉、確かに浸透しているんですが、正直に言うと、葉山町も、今、協働の指針に基づいて、町民の皆さんと一緒にまちづくりをしていくという、第四次総合計画に掲げて進めてきたところなんですけれども、うまくいっている部分もありますけれども、まだまだ足りないなという部分もあり、それはどこにあるんだろうと思ったときに、やはり行政側の透明化に向けた取組みがまだ不十分なんじゃないか、それから、やはりいろんな場面で住民の方からアンケートを頂いたりとか、それから話し合う場を設けたりはしているんですけど、なかなかこれも思うほど進まない。

そんな中で、今回お伝えさせていただいたんですけども、デジタルを活用して24時間365日いつでも町民の方から意見をもらえるような仕組みをつくっていくというふうに考えたときに、協働をもう一つ進めたいという思いが正直言っていました。その中で、今まで使われていない「キョウドウ」という音の言葉を考えたときに、やはり協力して働くという今までの概念より、共に動いていこうというほうが伝わるんじゃないかと思いました。「健幸」という言葉も他自治体でも使われていて、通常の家康の「康」という字ではなくて、「幸せ」のほうを使っている。「ガッコウ」についても楽しい校と書いて「楽校」。やはり3つ目もできたらこの第五次総合計画に今後浸透させていきたいという思いを込めながら、造語で「共動」というのを立てたというのが事務局の提案でございます。

○委員（近藤大輔）

納得したような、していないような。葉山語みたいな形で、葉山ならではのオリジナルティーみたいなものは、行政サイドのほうでいろいろ考えられてつくったんだろうなと思いました。「共に動く」。他の委員の御意見もあるかと思うしますので、私、まずは意見としてちょっと付しておきます。

○委員（高梨麻美）

今、同じところなんですけど、私、逆に「共動」の「共」の字にもちょっと引っかかりを受けて。そもそも「共同」の字ではなく、協力の「協」を使おうっていうふうになっていったときの流れとしては、共にっていうのが、同じ立場の人が同じように一緒にやるっていう、今の公共機関のこの字じゃなくって、協力するっていうのは、それぞれ立場が違うという前提に立って、それで協力し合う、心を一つにしてやろうっていうことがあったはずなんです。第四次の頃に使っていた「協働」という字は、そういう意味合いをつけて、あの当時、内容としては使っていたんじゃ

ないかと思います。

そうなったときに、今回ここで言いたいものが、決して同じ立場の人が同じ動きをするという意味合いを指した共動にはならないと思うんです。そう考えると、第四次でやっていたことを否定する根拠ってというのはあるのかなってというのがまず一つあります。「共に」っていう字を使ったときの、全員が同じ立場にあるっていう前提自体がちょっとイメージが違うかな、協力し合うっていう意味合いが消えるっていうことに対して、それでいいんだろうかっていうのは感じました。

一方で、もっと動きを出してアクティブにしたいっていう意味合いでというお話も、気持ちは分かるところでもあるので、ただ、この字を見たときには、「共に動く」って、何か一斉行動をさせられるようなイメージを持つ可能性もあるなという、その漢字のイメージが決して真意が伝わるものかという、気になる部分ではあります。

また、造語をつくることのよさはあるんですが、例えば、これを小学生に浸透させていきたいってなると、漢字のテストのこともあるなっていうのをちょっと懸念したところではあります。

あと、「楽校」は決して新しい造語じゃなくて、政策で結構出ていますよね。水辺の楽校っていうのが、各自治体のこの部分を水辺の楽校としてこういう活動をしますっていうのが出ているので、決して葉山だけのオリジナルのワードということではないと思いますので、そう考えたときに、何も絶対に新語を使わなきゃいけないっていう発想にしないでいいのではないかなというふうに感じました。

あと、楽校の説明が下に書いてあって、「新しい活動のことです」っていうふうに書いてあるんですが、どちらかというと、水辺の楽校はエリアを指していて、その活動の場を指して「楽校」っていうふうな言葉を使うことのほうが一般的なイメージがあるので、あえて同じ言葉を使うのに、ちょっと他の自治体さんや政策等で使っているのに、と合わない定義をするというのはややこしくなるんじゃないかなっていう気もしました。

○会長（臼井正樹）

ありがとうございます。ちょっと私からも楽校のところだけ、1つだけ先に質問なんだけど、学校って、教育委員会をつくって、行政部門から一定の距離を置いたところで独立した機関として機能させ、しかも学校の運営そのものは学校長が基本的な責任を持つっていうのが大きな枠組みじゃないですか。だから、そうすると、場の話なのか、活動の中身なのか。活動の中身になっちゃうと、その学校っていうのは、小・中学校という枠組みの中の話なのか、外の話なのかって、中の話を総合計画でしちゃってそもそもいいものなのかって、その議論ってできていますか。

つまり、総合計画で学校の、一般的な学ぶ場所としての学校ね。だから、小学校・中学校みたいなところに関しての学校の具体的な授業の中身に関して、総合計画でどこまで書くことが許されるのか。つまり、「こういうことを期待します」ぐらいのことは書けると思うんだけど、「こうします」ってそもそも言っちゃったときに、それって教育委員会があることとの関係で、町行政の中でそのことは大丈夫なのかっていう議論を教育委員会と調整が済んだのかっていうのがすごく気になります。

つまり、踏み込んじゃいけないところへ踏み込んじゃうと、行政部門が教育に踏み込むことを、行政部門で仕事をしている人、あるいは、その首長になった人って、割と気にしてそこへ踏み

込みがちになるんだけど、それを抑える仕掛けとして教育委員会の仕組みがあったはずなので、そこがうまく境界ができた状態でこのフレームが議論されているかどうかがとても気になります。

○事務局（佐野政策課長）

今の臼井会長のおっしゃられた話、そこまで踏み込んで教育委員会との調整が今現時点でできているとちょっと言いづらい部分がございます、学校のほうから頂いている調書、あるいは、日頃から関わっている中での関係性で記述している部分がある部分もあるなというふうに感じたので、そこはいま一度、教育委員会のほうからこちらの文章について、これはちょっと越権行為なんじゃないかとか、ここまでは書き過ぎなんじゃないかという話をちょっと調整させていただきたいと思います。

○会長（臼井正樹）

気をつけないと、この計画自体が町の総合計画になるんだけど、町の総合計画っていったときに、教育委員会がここに対してどういう役割を担うのか、どういう責任があるのか、それは町との関係はどうなのかみたいなことはすごく気になります。逆に、ここで書いてあることが独り歩きしたときには、つまり、町が約束をしちゃった話になるから、教育委員会が、現場の先生、校長先生がどう思っているかという話とは別に、この話が公約みたいな話になっちゃうでしょう。公の約束になっちゃうでしょう。そこが物すごく注意が要るかなと思います。

例えば、県立高校の中身について、幾ら県知事だからといって、具体的中身に踏み込んでああだこうだ言うことは、基本は差し控えるべきですよ。考え方としてこういう考え方がどうなのかっていうのを提示するのはいいけど、具体の運用の場面で個別の判断を権力者が行政の長だからといってしていいのかっていうと、それはしないのが原則だよ。そのための仕組みとして教育委員会があるということを前提で考えてください。

○委員（富樫俊夫）

御指摘ありがとうございます。ちょっとだけ教育委員会の立場になって話をさせていただくと、この「楽校」っていう言葉は、町というよりも教育委員会のほうでかなり昨今使わせていただいている言葉でございます。先般、シンポジウムを行わせていただいた際も、この「楽校」という言葉を使わせていただいたんですね。やはり葉山町の教育委員会としまして、例えば、学校というよりも、教育活動そのものを新たに、どんどん新しいものの形で展開していきたいというその思いがありまして、そういった中でわくわくする、そういった学びをつくっていこうと。それは子供だけではなくて、大人に対しても同じような考え方の中で、こういう「楽校」という、学ぶだけではなくて、「楽しんで学ぶ」の意味も含めて「楽校」という言葉をかなり使わせていただいております。そこを酌み取っていただいたのかなというところはございます。

ただ、今、会長がおっしゃったように、立場性の違いのところのところをおっしゃられると、教育委員会としてもやっぱり考えなければいけませんので、そこらはまた調整をさせていただきながら考えさせていただければというふうに思います。気を使っていたところがあるかなと

いうふうに思いますので、本当にありがとうございます。

○会長（臼井正樹）

ありがとうございます。ほか、御意見いかがでしょう。どうぞ、お願いします。

○委員（福安德晃）

2つフィードバックがあるんですけども、まず、構想のほうなんですけれども、最初のプロローグから始まって、エピローグに行って締まると。これ、僕、なんかすごいいいなと思って。このプロローグを読んだら、じゃあ、自分は2040年どうしているんだろう、どういう町になってほしいんだろうっていうことを具体的にイメージしながら多分読むと思うんですよ。読み進めて、最後のエピローグで終わると。そこまで考えさせたんだったら、逆に言うと、何か考えた上でフィードバックをするような何か仕組みがやっぱり、もうここから入っているほうがいいよなって思いました。すごくいいなと思ったんですけど、何かもう考えてそこで終わっちゃうと。

この基本構想って16年間アップグレードができていかないものなんでしたっけ。つくったらもうこれで決めっていう、そういうものなんですか。それとも、フィードバックがあれば修正可能なんですか。

○事務局（佐野政策課長）

基本的に基本構想のパーツについては細かく更新していくというふうにはあんまり考えていなくて、もちろん、変更が必要であれば長い期間になるので修正していくことになると思うんですけども、その実現に向けて基本計画が4年ごとで4期という話になっているので、そちらのほうは必ず、その基本計画期間が終わったときに、計画していた4年間で何ができたのか、今何が足らないのか、目指す姿に対して次のステップでどうしていくのかというので、4年ごとにリニューアルしていくと、そんなイメージを持っております。

○委員（福安德晃）

なるほど。では、フィードバックを頂いた上で、基本計画に反映させていければいいという感じですよ。いずれにしても、やっぱり考えたからには何かフィードバックしたいなっていうふうには思いました。

まずそれが一つで、もう一つが基本構想じゃなくて基本計画のほうですかね。さっきの「楽校」、「共動」云々のパートなんですけれども、この3つの柱を見ていくと、僕たち、生きていく上で経済活動ってやっぱり最も重要な柱だと思うんですけども、何か経済が割かし軽視されているんじゃないかなっていう、何かそんなイメージもあるなというふうに思いました。楽しげなんですけれども、生きていく上ではやっぱりちゃんとお金を稼いでいかなければいけない、ちゃんと収入を得ていかなければいけないっていう部分って重要だと思うんですけど、割かしそういう要素がない計画だなというふうには感じました。

以上、2つのフィードバックです。

○会長（臼井正樹）

ありがとうございます。後半のほうは御意見みたいな話になるので、前半のほうですけど、16年間、全く同じで行くかっていう話は、必ずしもそうではないんじゃないかと思います。だから、例えば、折り返しの8年たつぐらいのところで状況が変わっていれば必要に応じて、全面改定をするのはまずいと思うけれども、幾つかの項目に関して、構想の幾つかの項目に関して状況に応じてその時代、その状況に合わせた対応をすることは当然あり得るんだろうなと思います。

だから、4年単位で計画があるわけだから、4サイクルの計画の例えば真ん中辺りで必要があったら部分修正を状況によってはすることはあっていいし、それは、計画もつくったのを4年ごとで見直しをしていただくんだろうけれども、その見直しをする中で、最初のときのスタンスと少しニュアンスが違う話になるかもしれないし、それはそれで当然あり得る話かなと思います。いいですかね。

16年後に小学校の通うお子さんたちがどのぐらいの数いるかっていうのが予測はできるけど、現実には分からないですよ。今よりもっと減っているかもしれないし、あるいは、少し盛り返しているかもしれないし。減少の幅が厳しければ、小学校の在り方ももう少し何か踏み込まなきゃいけないし。あるいは、逆にいいほうへ変動してくれていけば、それはそれでそのことを受けた対応が必要になるというのは当たり前の話なので。というふうに、初めっから変更ありっていうことではないけれども、現実的にはそういうことじゃないかと思うんですが。

あと、いかがでしょう。何か御意見あれば、はい、お願いします。加藤委員。

○委員（加藤清）

「健幸」で三本柱になっていますよね。一応、自然環境とか、医療福祉と健康に取り組む場所。健康に取り組む場所で、このところ、何も書かれていないような気がするんですよ、記述の中で。その辺がちょっと足りないのかな。文章の都合で書いていないのかなと思ったんですよ。せっかく三本柱を立ててあるのに書いていないということは、「健幸」に取り組む機会・場所ということでは、葉山体操とかいろいろありますので、そういうのをやっているようなのを含めて言っているんだろうと思うので、その辺いかがかなと思って。

○事務局（大屋主任）

御指摘ありがとうございます。まだこの文章も固まっているとは思っていないので、そういったものを含めて加筆させていただければと思います。

○会長（臼井正樹）

これも前に言ったと思うんですけども、WHOが定義しているヘルスコンディション、健康の状況っていうのが3つのファクターから成っていて、心身機能・構造っていう医学的な対応すべき部分とアクティビティー、活動、御本人がどういうふうに体が動いて何ができるのかみたいな話と、最後、3つ目がパーティシペーションって、参加っていう要素、3つのファクターがある。その3つが全ていい状態のときに、若干どこか不十分なところがあればそれは補いつつ、トータルでその人の健康状態を把握するっていうのがもう20年以上前にできているWHOの概念な

ので、健康の「康」を「幸」にしなくても、「健康」でもその大本のWHOの概念との関係でいえば十分意味は通じると思うし、そのことを受けた例えば保健医療政策みたいなこと、あるいは健康づくり政策みたいなことを中に盛り込んで文章をつくったほうがいいかもしれない。そこはまた検討してみてください。

まだ残りがあるので、先に、もし御意見あればここでまた聞いておきますが、もしよければ、次、残りのパートの御説明をお聞きしてからまた意見交換のほうを。じゃあ、お願いします。

《事務局より説明》

○会長（臼井正樹）

御説明ありがとうございました。今、御説明いただいた25ページからになりますかね、の部分で何か御意見や御質問がありましたらお願いします。いかがでしょう。はい、お願いします。

○委員（早川委員）

30ページの施策指標の②なんですけれども、私のほうから一つ御提案なんです、表現の違いだけなので、重箱の隅みみたいな御意見で申し訳ないんですけど、「学びの場につながっていない児童」というところを「学びのサポートを必要としている児童」という表現に変えてみてはいかがでしょうかというのが提案です。

今現在、不登校の子たちがいるのであれば、その保護者とか当事者の人たちが見たときに、否定的な表現よりかは肯定的なほうが見てどきっとしないんじゃないかなというのが提案の理由です。以上です。

○会長（臼井正樹）

ありがとうございます。今のはおっしゃるとおりで、表現はできるだけやわらかいほうがいいですね。議論していただいて、どうしても元のでなきゃまずいんだったら、その理由も考えてください。

あといかがでしょう。はい、お願いします。

○委員（高梨麻美）

35ページの保健医療の健幸観の説明の文章、一番上にあるところなんです、健康である感じと健幸の違いが何かがいまいちよく分からないんですが。

○会長（臼井正樹）

最初の箱の中、1行目の後半、「その人にとっての「健康」や「健康である感じ」、「健幸観」を高めることができるよう」って書いた場合には、最初の「康」のほうの「健康」と、健康である感じと、それから、ここで使っている健幸観と、これは違うものということになりますが、説明できますか。もし難しいようだったら、逆に言えば、表現の仕方を工夫、改めてしてみてください。

ここの辺りの話は、議論し出すと、結構いろんな話が複層して難しいですね。

○委員（高梨麻美）

その③のところの多分、情報提供の「供」の字が抜けているので、後で直しておいてください。あと、ここじゃないところでウエルビーイングという言葉が出てきていて、それと、ここで述べる健幸感の違いがあるのかどうかもちょっと気になりました。なので、その辺りの全体を通しての言葉の、健康に関する言葉の整理のところがもう少ししていただけるとうれしいなと感じました。

○会長（臼井正樹）

ちょっと途中で言いかけたのは、ある知事が「未病」っていう言葉を使って何かを言ったことがあるでしょう。あの「未病」って1.5次予防なんですよ。1次予防と2次予防の間の話なんです。それで、もともと1次、2次、3次っていうのは昔からある言葉で、それを特定の人が「未病」という言葉を使って発言したのために、さらに分かりにくくなっちゃった。保健行政の関係者は、もう1次、2次、3次っていうのはよく分かっている話だから、1次と2次を併せた予防みたいなことで説明してくれれば、みんながずっと入ったのにといいふうな話も一方ではあるみたいな話の中の議論なので、ここは。中身を丁寧に分かりやすく書いておいたほうがいいと思います。

○委員（高梨麻美）

施策でいう健康のコウを「幸」にするってしたときに、じゃあ、従来の「健康」とその「健幸」の違いは何なのかっていうことや、この文章でどっちの言葉をいつ使っているのかというのが非常に分かりづらく、新語をつくることでかえって分かりづらくなるというふうに感じました。

○会長（臼井正樹）

今のは、前のときにもお話ししたけど、ターゲットが幾つの人、どのくらいの人を想定してこの文章ができているのかっていったときに、小学生の低学年はさすがにちょっと無理だろうと思うけど、中学生だったら少し説明すれば分かってほしい。分かってくれる。読んで全部分かってくれとは言わないけど、先生が説明してあげれば理解できるレベルの書き方で書けていると、中学校3年生ぐらいだったら、先生に聞けばあとは大体全部理解できるぐらいだとしても分かりやすくっていい話かな。だから、それが例えば大学生でも難しい話になるとちょっとまずいよねって話になるっていうのは意識しておいてください。

あといかがでしょう。

○委員（高梨麻美）

ほかにもいろいろいっぱい言いたいことがあるんですけど、皆様のお話が終わってからにします。

○会長（臼井正樹）

私自身も細かなところで、てにをはになっちゃうけれども、気になるところはたくさん残って

いるんです。それで、それはこの会議が終わった後、5月の上旬いっぱいぐらいまでを使ってゆっくり読み込んで修正の提案をしようかと思います。さっきの「健幸」、「楽校」のところはちょっと置いておいて、それ以外のところでの言葉の使い方、例えば「町」とか「本町」とか「葉山町」とかって、言葉が場所によって使い分けがされていて、これは分かっていると直したくなる。統一したほうがいいと思うんだよね、できるだけ。しかも「本町」とかっていう言い方は行政的によく使うやり方なんだけど、それは、そう書いたときには町の中の人に向けてメッセージになっちゃうので、例えば、町に通っている人たちとか、葉山町に関心がある外部の人たちまでを巻き込んで、この計画をよかったら読んでくださいっていうんだったら、基本的には「葉山町」って書いたほうがいいと思います。これは多分、担当セクションが書くときにそれぞれがそれぞれで工夫して書いたから、幾つもの表現の仕方が交ざっているんだと思います。その辺りも含めてゆっくり私の立場で見直しをさせてもらいますが、気になるところがあったら言ってください。じゃあ、はい、どうぞ。

○委員（高梨麻美）

全体的なところの話なんですが、さっき福安委員もおっしゃったように、一番最初の冒頭の、いいなって思ったんですね。ですが、「才」の字はちゃんとした「歳」の字のほうにしたほうがいいと思うんです。「何歳になっています」だけじゃなくって、「今、葉山町は……」みたいな形で、これから葉山町の話をするよというところまで踏み込んでここには書いてもいいのかなと、年だけじゃなく。何かもう一つ言葉がついてもいいかなというふうに感じましたというのがまず1つ目。で、それが下の説明文の「町の未来を想像することから始まります」につながると思うんですね。自分がそれを説明するっていう文脈で読むっていうふうにつくるといいなというふうに感じました。

次のイメージ図のところは、これからつくられるというお話だったので、中身は変わると思うんですが、町の従来のエリアの例えば木古庭とか、上山口とか、町エリアのそれぞれの特性がこの絵の中に出るのか、それとも、全部が一体化した状態の絵になるのかっていうところのイメージがもしあったら教えていただきたいなというのと、北が上じゃない感じの絵ですよ、今。そういうイメージでいくのかとか、そういったところがこの絵の中では気になりました。

今は言葉を入れてくださっているんですが、この言葉がなくなるっていう感じですよ。まず、町のイメージの地理的な絵でいくのか、それともそれはない、葉山には全体的な同じ均一化したイメージがあっていくのかっていうのは、何かあるところですか。

○事務局（佐野政策課長）

その部分は、少し悩ましいなと思っている部分があって、あまりその絵から具体的な場所がイメージされるのは、ちょっとタイミング的にいかがかというような内容も含まれているので。さりとて、葉山町のほうでは、堀内・一色辺りのところと上山・木古庭の市街化調整区域のところと同じ要素になるのかというと、やっぱりそんなことはないです。ただ、何となく葉山の町全体を、今おっしゃられたように、ここは木古庭のこと書いてあるよね、ここは上山口のこと書いてあるよねっていうのを踏まえつつも、これってどここの場所を何かこうしようとしているんだって

というのが分からないようにしなきゃいけないパーツも少し入っていたりして。なので、必ずしもどちらにということとはちょっと今明言できないんですけども。

○委員（高梨麻美）

例えば「学校が2校になる前提である」という文章が本文中にあって、この絵の中に2校あると、ここはあの学校が残ってっていう統廃合のイメージ図になっているのかなっていうふうに私は最初読んだんですね。そのときに絵が「あ、これ、じゃあこういうふうに見るのかな」とか「これはどこ学校なんだろう」とっていうふうに、町民だとやっぱり町の絵だって思ったときに、自分の家の辺りを見るというふうに考えてつくっていただけると、私だけですかね。住んでいるエリアが気になるなっていうふうに感じました。絵に表すことのよさっていうか、この海岸線の具体を描くと、そういう町の地図だっていうイメージを受けるので、そこがちょっと懸念点です。

○事務局（佐野政策課長）

そういう意味では、最初、他自治体の絵が最初に載っていたと思うんですけども、「あ、なんかこういう、町がこういうイメージのことを進められていけばいいな」とっていうのを参考に、今回の第五次には取り組んでみようと思ったところもあるんですけども、それを今、担当レベルのほうで、今、事務局のほうでつくろうとすると、若干やっぱり葉山町の地図をポンチ絵として一回落として、そこに「このエリアってこういうことが起こり得るよね」という話を意識しながらつくったんですけど、まさに今おっしゃられた部分、まだお外に向けて、ここにつくるんですという議論が十分じゃないものを明確にそういったふうに分かるように書くことが大変難しい部分もあるので、葉山町全体の2040年こんな状況ならいいなというのをぼんやりと、でもこんなふうになっているんだというのが分かるレベルになるのではないかなと思っています。

○委員（高梨麻美）

分かりました。1つの絵じゃなくって、幾つかこうばんぱんって絵が出る形でもいいのかなというふうに思いながら聞いたところです。

あと、この絵だとマリンアクティビティーとか海岸の部分のものがあんまり出ていないなとか、古墳のことは書くのかな、書かないのかなとかいうところとか、幾つか気になりましたので、また次の絵のときにでもと思います。

あと、この一番上に書いてくださっていることや後ろのほうで目指す町の姿として出ている「自分らしく、人とつながる町」というフレーズが私自身はちょっと気にかかる場所もあって。一人で楽しく過ごしてもいいじゃないっていう気もするんですね。つながらないといけないっていうメッセージに読み取れるような気もして。むしろ、自分らしく葉山で生きるとか、自分らしく葉山に生きる、葉山で生きるっていうときに、一人の時間も充実して楽しめる。場合によっては人と一緒に楽しむこともできる町をつくる。もちろん、町をつくっていくときに、関わってほしいっていう思いがありますし、一緒に何かをやるっていうことは当然のことだとは思いますが、目指す町の姿として、あなたは人とつながりなさいっていうふうに町から言われるのは、ちょっと何か違うような気もしています。

○事務局（佐野政策課長）

すいません、もしそこにつながらなければいけないというメッセージ性が強いと思われるなら少し考えなければいけないと思いつつも、結局、つながらないことも人とつながっているんだと思うんですね。ですので、自分らしくというのはその人の判断ですが、ただ、圧倒的に多くの人が何かしら一人で全くつながらないで生きている人はいないんじゃないかなという思いはあるんですね。

○委員（高梨麻美）

それが町の姿というふうに言われてしまうと、それだけっていう、むしろ。「自分らしく人とつながるのが町の姿です」ってなったとき、もっと自然の中でゆったり過ごせるとかも町のよさなんじゃないんだろとか、葉山らしく過ごすっていうのは、もっと豊かなことがあっても、人とつながらずに一人でじっくり考える時間もあってもいいのじゃないかなっていう気を感じ、そういう思いがあったので、意見として一応これは申し上げます。

それと、未来への、ごめんなさい、これ、施策のところでも同じ言葉があるんですが、「未来へ守る思い」の「思い」という言葉を使っているんですが、「美しい海と緑と笑顔あふれる」っていう状態が示されている形であって、思いではないと思うんですね、この言葉は。思いだったら、何々するようにしたいとか、何々しようとかが思いじゃないかなと思っていて。笑顔あふれるように、これは現状のそういう姿で、こっちがむしろ未来の姿なんじゃないかなというふうにも感じ取ったところで、ちょっと文言のことかもしれないんですが、少し違和感を感じました。施策の一番大きなところに関わることだと思うので、言います。

この施策を全部見たときに、私たちの町民の思いとして後ろに書いてくださっていた「好きと言いたくなる」とか「住み続けたい」とか「学び続けたい」がどこにどう関わってくるのかとかいうのが一切ここに入ってこないんだなっていうのもちょっと感じました。例えば、それが「健幸」、「楽校」、「共動」っていう、今、仮に3つ置いてありますが、その言葉の中に、みんなの思いのここがそれですよっていうのが説明文にあったらいいのになとかいうふうに感じたところです。ごめんなさい、ばらばら言ってあれですけど。

あと、政策方針の文章がばーっと書いてあるのが「何々へ」っていう終わりになって統一感があってすごくいいんですが、「暮らしへ」っていうのと「未来へ」っていうのがあって、未来のビジョンの中には暮らしもいろいろなほかの環境も入ってくる形になっているので、ちょっと階層が違うフレーズを並べているように感じて、全て全部「何とかな未来へ」になるほうがまだイメージが付きやすいなというふうに感じました。

あと、一番上の教育のところを書いてある「系統的かつ探求的」の「求」の字は、「求める」じゃなくて「究める」のほうの「探究」を使っている部分もあると思うので、ここも漢字の整合性があるといいなというふうに思いました。

前のページから読んでいくと、これが先に出てくるので、「施策って何だ」っていうふうにも思うかもしれないなと思いました。この総合計画の施策ですよっていうのがここに入って、第五次総合計画のっていうのが入っていないと、何の施策か分からないなっていうふうに思いました。

同じことが次のページの1からのところでも、計画が何の計画かがこのページだけ見ると分からないので、せめて一番最初のタイトルのところでは、第五次何々計画のつていうふうな名称が入っているほうがいいと思いました。特に後ではPDFで抜粋してそこだけ読もうとすると、これは何の話をしているページなのかが分からないっていうのが続くなと思いました。

先ほど先生もおっしゃっていたんですが、「本計画は町が」つていうふうな文章になっていて、ここだけ見たときにどこの町の何の計画かが分からないっていう感じの1になっているので、せめて一番最初の初出のところで書いて、その後はちょっと記載しますとかいうふうな形でもいいと思うんですが、冒頭で説明があるといいなと思いました。

○会長（臼井正樹）

今のところね、何だっけ、基本構想の1ページの最初の頭の出だしでしょう。「本計画は、町が策定する行政計画の中で」つて書いてあるんだけど、行政計画つて言葉が要る。例えば、町民の協力の下で進めるんだったら、社会計画的な要素が入っているんだよね。今、町がつくる計画で全く行政だけの問題で処理をする計画は中にはあるんだろうけど、多くはこういう形で意見を、いろんな人の意見を聞いてつくるのであれば、それは行政計画だけではなくて、社会計画的な要素が入っているんだよね。だから、書かないほうがいいんじゃないの。とかつていうのが、そういうところが私は気になります。

○委員（高梨麻美）

あと、そのまんま後ろのほうへ行ったら、6ページ目のところのコラムのところ「指標を作成しました」つていうふうな形になっているんですが、むしろここは既に誰かが作成した指標のデータを持ってきているだけなのではないかなという気もするので、ちょっと何ていうんでしょう、これが本当にその指標として適切なのかということや、長所を表すことだけを指標として町が抽出しているように読み取れるのはあんまりよろしくないのではないかなというふうに感じました。なので、町の長所をデータで見る、上のタイトルに合わせていくほうがいいんじゃないかなと感じました。

あと、さっきの町民の思いの10ページ以降のところの話は、施策にどう反映されたのかがいまいち、1つの言葉にくってまとめられちゃった結果、「え、本当に私が入るとつながるがこの3つと関係するのかな」つていうのがもっと、好きと言いたくなるときに別に、言いたくなる相手がいるでしょうつて言われちゃえばそうなんですけれども、何かちょっと、もうちょっと広い視点で捉えていってもいいんじゃないかなという思いが出ました。

10ページのところに、「次の図のように、町民の皆様に通ずる町の将来への思いを見てとることができました」つてあるんですが、この絵の中からどう読み取ったのかというのが分からないのと、大きい字に丸がついているわけでもなく、すごく小さいのにも丸がついていて、この黒丸の意味は一体何なのかということの説明もないので、すごい恣意的に積んでいると言ってしまえばそういうふうにも見えるので、この解析で正しいのかというところは、もうちょっと検討が必要ではないかなというふうに感じました。

その4のお話を踏まえての5のところは何で、自分らしく、ウェルビーイングをしようつて

いう当初の御意見だったような気がしていて、ウエルビーイングの実現が2040年の町の姿なんじゃないかなと思っていたんですけど、それが「人とつながる」になってしまっているなというところで、それがウエルビーイングの姿ですって言われると、私は非常に、12ページの一番最後の文ですが、自分らしく人とつながっていたら、それがウエルビーイングの姿ですって言われると、本当にそうかなというのが疑問でした。ここは意見です。

あと、その次の13ページからのところのコラムも、毎回何かいろいろ言って申し訳ないですが、まず、町民目線で書いたものですっていうふうな形で書いてくださっているんですが、14ページの23歳女性の日記は「今日初めて葉山に行った」で始まっていて、「この人、町民なのかしら」ってというのが気になりました。

それと、あと、性別書く必要がありますかっていうのも一つ気になりました。年齢は誕生してから何年という客観的な指標になりますが、性別は結構、多様性のあるものでもあり、あえてその性をここで示す必要があるんだろうかというのがありました。

あと、5歳さんのことだから、38歳の女性が一番最初にあるんですってなったんですが、だったら、いっそ5歳の日記がここにあるほうがいいなと思って。5歳ってまだ字が書けないじゃないですか。書かないっていう前提だけど、例えば、デジタルの今だから、海に行って、それで自分でタブレットで写真を撮って、それを自分の日記に上げるっていうこともできるんですよ。なので、ここには、5歳さんが撮った写真だったり絵があるだけでも、町のことが大好きっていうのがもう5歳さんが思っているっていう絵があって、それとお母さんなり保護者の方なりの日記が横にあるみたいな形でも、5歳の子がすごく町を生き生きと生きているっていう感じがしていんじゃないかなと思いました。文字にする必要はないのかなというふうに感じた次第です。

あと、13歳の中学生であつたら、もっと町に関わってほしいというのがこの文章を読んだ私の印象です。もう中学生なので、むしろいろいろな活動を小学校からやってきていて、私のその活動が町にこうやって生きているっていうふうに実感しているっていうふうな内容のほうがいいかなと思いました。

34歳の男性の日記のところでは、都心のほうがごみの分別が簡単で、あれは環境によいとは思えないっていうふうな形で、他自治体を批判しているように読み取れる文章になっているのと、果たして2040年でその地域が本当にそうかっていうことも分からないものですので、あんまりそういうほかの自治体とうちを比較してこっちがいいねって文章じゃないほうがいいんじゃないかなというふうに感じました。

あと、15ページのほうの70歳の男性の日記のところの文章も、「細い道も多いが、車が入りづらいからか」っていうふうになっているんですけども、なんかマイナスな要素のように読み取れるので、車が入らない子供が遊ぶエリアが用意できている町だよっていうふうにつくり替えられるような文章のほうがいいのかとか、次の人の「免許を返納して外出しづらいなと思っていた」ってというのは、結局、免許を返すまでその人は不安だってことですよね。それよりは、それを先回りして、安心して免許が返せる町だっていうふうな文章のほうがいいだろうなというふうに思うんですね。町にはこういうサービスがあるから、もうこの年齢になったら運転しなくてもいいのよみたいな趣旨の文章のほうがいいんじゃないかなっていう、全体的な印象を取って、思ってそういうふうに感じましたってというのが、ざっくりと前半のところを見ての印象です。

後半のところのは、さっきざっとお話しした3つの言葉のところの気になったっていうことや、あと、KPIを使うかどうか分からないっていう説明だったのでいいんですけど、KPIっていうのが急にしたら分かんないだろうなっていうところを感じました。

あと、細かなところは、教育をちょっと見たときに、例えば、29、30の教育のこの文章のところで楽校をつくろうの話にはなっているんですが、やはり課題として出てくるところは、学校教育の話が、1番のところの「もっとワクワクする学びを」って書いているんですが、現状と課題は、義務教育課程の話しか出ていないように思えるんですね。だったら、ちゃんともう最初からここは義務教育課程についてこういう現状や課題があるんです。それ以外の社会教育ではこうですかいう、現状の教育のそれぞれの場に応じて書いた上で、それをまとめて施策として「だからこういうふうになるんです」っていうふうな話にしたほうが、「もっとワクワクする学びを」っていうことに対しての現状と課題であれば、もっと広い視野で課題を上げるべきじゃないかなと。学校教育現場とその他が今断絶している状態にあるとか、そういうことも入る、もしあるならばそういうことがあるとか、あるいは、現状もうできているけれども、それをさらにやるんだっていうふうな趣旨になるとかいうふうな形になるべきかなと思いました。

あと、次の子育てのことは多分この前も言ったんですが、子育てっていうのは主体が親だけなので、子供が育つっていうことも考えて、「子育て・子育て」っていうふうな言葉を使う自治体さんもほかにありますが、そういう「子育て・子育て」みたいな形で、子供のほうを主体にした言葉もキーワードとして出してもいいんじゃないかなっていうふうに感じました。すいません、ざっと見たところ。

ごめんなさい、あと、現状と課題が本当にデータで出ているものなのかが全体的に読んでいて「本当」って思うことがありました。一般的なことなのかもしれないんですけど、葉山町で本当にそうなのかなっていうことや、例えば、健康観の話のところについて、葉山町で、今、健康観がどうなのとかいうこととかの話がないとかいうあたりとかが気になりました。それは全体的な現状と課題のところを読んだ印象です。以上です。

○会長（臼井正樹）

ついだから、31ページの子育てのところをちょっとだけお話しすると、今、ちょうど読んでいる本が家族社会学の有名な先生が書いた論文章を読んでるんですよ。子育てに関して、落合恵美子さんっていう有名な社会学者です。彼女が書いた本を、読んでるんだけど、子育てについて、東アジア・東南アジアの諸か国を比較して論文を書いているのね。20年ぐらいのスパンの中で書いた論文を並べてあるんだけど、それを読んで分かったのが、子育てって言葉で僕たちが意識したときに、家庭の中で親が育てるみたいなこと前提で頭が固まっているんだけど、落合さんの論文ではそうじゃないんだよね。だから、子育てっていうのは、家族もするけれども、家族も拡大した家族っていうのがあって、子育てをする外部労働者が家庭の中へ入ってサポートする。だから、雇われてサポートするようなものも含むのが諸外国の例だし、それから、自治体あるいはパブリックなセクターが行う保育行政も子育ての中に入っているし、それから、それだけじゃなくて、NPOやコミュニティーが行う保育の支援も子育ての役割を担っているっていうのが、福祉ダイヤモンドとかっていう言葉で4か所ぐらい、4つぐらい、国、それから市場、非市場、家族み

たいなところの4つぐらいの主体が関わりながらやっているのが東南アジア・東アジアの子育てだっているふうに書いてあるんで、これ多分、家庭で子育てすること前提の話で書かれているんじゃないかと思うんだよね。だから、それが本当にそれでいいかっていう話は、少なくとも、子供さんを預かってくれる有償の外国人の人が入ってくるっていうのはそもそもまだ日本はなじまないけれども、それでも例えば保育所があり、保育所も公的な保育所と公的でない保育所があり、それから、葉山はたしかかなり保育関係のボランティアだけでなくNPOも含めて活動が活発にあったと思うので、そういうもの全体の中でどうするかっていう話の視点がどこかに書いていないといけないんだけど、それは後で僕もチェックします。

それから、もう一つだけ。いろいろお話を頂いたところなんだけど、気になったのは、これを言葉としてどう扱うのかな。「自分らしく、人とつながる町」ってやると、「自分らしく」っていうのがどこにつながっているのか、どこにかかっているのかっていうと、「つながる」にかかっているように読めちゃうんだよね。そうでしょう。「自分らしく」、「町」って、「町」にかかっているよね。「つながる」って。これを例えば「自分らしい、人とつながる町」にしたらどうなる。「自分らしい」で、そこで点を、一回読点を打つんですよ。読点を打って「人とつながる町」にしたときに、どっちにつながっているか分かんないでしょう。だから、高梨さんが言っている話は、例えば「自分らしく、人とつながる町」だと、「自分らしく」が「つながる」にダイレクトにつながっちゃっているから、短いワードの中で少し矛盾が起きちゃっているんだよね。だけど、「自分らしくあること」、「ある町」でもいいわけだ。その「自分らしく」の中身は書いていない、細かく書いていないけど、人とつながる要素もあり、自分らしくあることと人とつながるっていう要素が、両方が両立する、あるような町、あるいは、どちらかが大切にされる町みたいなことで、そこをファジーに読むんだったら「自分らしい」なんですよ。「い」で読点を打って「人とつながる町」ってやると、少なくとも高梨さんのその提起に関しては答えられる。だから、今みたいなのはさんざん仕事でやってきたからすぐ思いつくんだけど、頭を軟らかくして考えてみてください。

○委員（高梨麻美）

人とつながるのももちろん大事なんですけど、葉山町の自然環境や景観とか、そういうことに一切触れない町の姿になっているように読めるんですね。人とつながる町をつくり出す、葉山はっていうふうに読んだときに。目指す町の姿。なので、人とつながる町ですってなったときに、え、じゃあこの豊かな自然環境はなくなってしまうって、もっといろんな人が来てごった返す町の姿になることも予想され、懸念されますよね。

○会長（臼井正樹）

でも、それを言い出すと、ここの短いフレーズをどんどん膨らまさないといけないから。

○委員（高梨麻美）

「人と」を限定しなきゃいけないのかが私は分からなくて。なんか自然とつながることだっていいんじゃないかって思っちゃったんですね。後ろのほうで大屋さんが「ここ、人が抜けちゃってました」っていうふうにおっしゃっていたところがあったんですが、「自分らしくつながる

町」だったら、つながる相手が人もあるし、自然環境もあるし、そっちのほうがいいんじゃないかなんていうふうに思ったところもあります。つながる相手が人に限定されなくてもいいんじゃないかっていうのが、ちょっと個人的な思いとしてあって。

○会長（臼井正樹）

いや。いいのかな。今のかなり大きな議論だよ。僕は、社会福祉の研究者をやっていた私から言わせると、人は社会関係性の中でしか生きていけないと思っているから、だから、人と、他者との関係性がある人を取り巻く環境の中で最も大事なものだと思いますよ。

○委員（高梨麻美）

分かります。その上でこの言葉だけを聞いたときに、葉山のよさって本当にそれだろうかというのが一回聞きたかったという。

○会長（臼井正樹）

だから、それを目指そうっていうんだったらそれはそれでよく分かるけど。ただ、「自分らしく」ってところで読点を打ちちゃっていると、これ、独立して見るのか、どっかにかかっているのか、つながっているのかって読んだときによく分かんなくなる。ただ、つながるっていてもね、だから、自然とつながるのがどうだっていう話はよくあるけど、それ以前にさ、例えば、過去のそこで生活していた人々への思い、思い出とかさ、そういうものへつながるのは、他者との関係性の一つだと思うんですよ。だから、例えば、小学校へ通っていて、小学校が新しい形で今子供たちが勉強に通っているのを見て昔のことを思い出すのもつながる町、今の人たちの活動と自分の過去がつながって町のよさを感じられるような町という意味にもなり得る。それをだから人と全く切り離れたところで、自然環境だけで独立したものを町の政策目標として掲げることが適切かどうかという議論は、ちょっとしてみてください。

○委員（高梨麻美）

第四次のときって、人の話と自然の話だとか4つぐらいが並行してあったイメージがあって、で、人だけになっちゃうんだっていうふうにちょっと感じたところです。前のが「美しい海とみどりに笑顔あふれるころ温かなふるさと葉山」でしたよね。

○会長（臼井正樹）

だから、逆に言えば、もう行政のなすべきことが少しとがった形になったっていうことだと思うんだけど、そういうふうにとがらせていいかどうか。あるいは、でもな、自然環境っていつでも、人がいて初めて自然環境だからな。人が全くいない自然環境の議論は成立しないでしょう。一人も人が住んでいない場所の自然環境を議論しても。

○委員（高梨麻美）

分かっているながら、一応、言葉だけを読んだときに一切それが読み取れなくなることがいいの

かが。あと、「未来へ守る思い」とそこがどうリンクするかが。この「未来へ守る思い」の説明がどこにあったかがちゃんと読み取れず。この思いもすごく、そこに「美しい海」、「緑」、「笑顔」というキーワードはあるんですけど、その話があんまり本文を読んでいるときに、どこにそれが書いてあるかが分からなくて。結果、「人とつながる」しか出てこないように見えちゃう。

○会長（臼井正樹）

自然環境に関する記述のウエートが少し下がっている。全体にボリュームがちっちゃくなった感じ。ただ、個別には、環境へのその対応みたいな話は個々のところでは前よりも強く書かれているところがあるんですよね。

○委員（高梨麻美）

葉山に住んでいらっしゃる方のイメージとして、人とつながりたいという思いと、この豊かな自然環境の中で住んでいたいという思いとのウエートっていうのがどうなのか、個人的にちょっと分からないところではあるんですが、私は決してなんか人がいっぱいいることや人とのつながりがものすごく欲しいっていう人だけが住んでいるとは感じなくてっていうところもありました。すいません、ちょっと印象なんですけど、文言だけを見たときに、あ、ここ、自然が消えているような気がするなというふうに感じたところです。ごめんなさい、私の印象です。

○委員（早川隆子）

いえ、でも、すごい言っていることは分かるんですけど、言葉で表すの難しいなって感じていました。すごい分かります。難しいなど。

○会長（臼井正樹）

いろいろ意見出ましたが、なんかとりあえずまとめないほうがよさそうですね。今日の段階では人が生活する環境は、町の中に入っていましたよね、間違いなく。それは誰も否定しないよね。

○委員（高梨麻美）

インフラが弱いというふうに思いながらも、ここに住みたいって思っている思いもありますよね。そうなったとき、本当に人、何だろう、インフラ整備のいいほうが人に会うのだって楽なんだけれども、そういう都心に住みたいではなく、葉山町を選んで住んでいるっていう思いがなんかここにあふれると、表れる何かになるといいなっていう感じがするんです。

○会長（臼井正樹）

中で少し議論してみてください。答えを出さない。ただ、だから、立場的には2つの要素があり得るんで、例えば、町がつくる計画っていうのは誰のための計画かといったら町民のためでしょう。それはもう間違いがないんだよね。町民のためって考えたときに、町民の孤立、一人単独の主体みたいな特定の人の、その人の自立みたいなことを意識しながら考えているのか。あるいは、町というのはつながりのある町のほうがより望ましいのか。そういうふうに考えてつながりを意

識していったときに、もともと葉山町が大事にしていた自然環境との関係を、つまり、人が暮らすバックグラウンドである環境をこの計画の中でどういうふうに位置づけるのか。別の位置づけ方でちゃんとクローズアップされていれば、多分、それはそれで問題がないというのが、多分、高梨さんの今の発言だと思うので、そうだとしたら、そのためのをどうするのか。そこがうまくつながらないと、さっきの最初のキャッチフレーズのところをどうするかって戻らと思うんですが。

○委員（早川隆子）

私もこれ難しいなと思って見ていたところの一つだったんですけど、なぜかという、うまく言えないんですけど、今、逆にSNSとかで人との距離っていうのがすごい近いところもあったりで、葉山を選んで来る人っていうのは、逆にその辺を全て捨てて自然の中に身を置きたいとか、そういう思いも強かったりする。自然の中で自分でこう学び取っていく。でも、いざというときはみんなつながるんですけどね。そういう意味でいえば、自分らしく人とつながる町なのかもしれないんですけど、町の姿として、みんなが見ている姿とはちょっと遠いかもしれないっていうのは思いました。何だ、うまく言えないんですけど、人とつながりたくて来ている、葉山に住んでいるわけではないっていう人のほうが、私の印象としてはですよ、そこにあまり重きを置いていないかなっていう気がしたんです。

ただ、ただですよ、例えば、非常時が起きたときにみんなとつながっていないと都合が悪いとかそういうことがあると思うので、町としてはつながっていてほしいんだろなっていうのがあったので、こういう言葉になったのかなって私は勝手に解釈はしていたんですけど、その差がちょっとあるかなっていうのは思いました。だから、どれが正解なのかは私も読んでいて分からない。町が求めるものはこっちなんだろうけれども、住んでいる人たちはちょっと違うのかなっていう気はしました。（「自分らしく生きられる町のほうがいいなって」と呼ぶ者あり）そうそう、そういうことです。まさにそうおっしゃるとおりです。自分らしくいられるというところで葉山という環境を選んでいる気がいたしました。

○会長（臼井正樹）

さっきWHOの健康の概念図の話をしたんだけど、あれは3つのファクター、要素に分かれて、心身機能・構造、活動、参加。参加の部分がない状態って、例えば、私はこういう仕事があるんで寂しくはないけれども、こういう仕事が一切なくなってしまった状態だと、僕は地域の中でほとんどつながりを持っていない人間ですから、そうすると、多分、非常に寂しくなるわけです。それで、おそらく日本の退職した70歳を超えたぐらいの男性高齢者の多くは、今日の予定がなくて、参加するところがなくてという状況に置かれる人たちが多いです。それって、関係性が希薄になっていることで、それをあえて選んでも構わないんだけど、構わないときに、その人が全く社会関係性を絶っているのかといったときには、多分絶っていないんですよ。絶っていないから日常的な生活圏域の中の細々とした関係性を少し遮断したいっていう気持ちがあるんだけど、でも、関係性がゼロの全くない状態の人って、多分、たまらなく不安になり、寂しいはずなんだけどね。というのが前提でWHOの参加の概念ってできているはずですよ。

働くことだけを想定していないわけね、パーティシペーション、参加のところって。働くこと

だけじゃなくて、日常的に挨拶をするとか、何か困ったときにちょっと声をかけ合うということも含めて、他者とのつながりを拒否しないで、ある種、人に何かがあったら頼めるような関係性がそこにゼロではなく、その人のふさわしい関係性があるからその人はそこにいられるので。例えば、全く自分が誰ともつながっていないでぽつんとそこにいたら、そこに居続けられるかっていったときにちょっと難しい気がします。これね、若いうちは分かんないんだ。僕の場合でいくと若いうちは分からなくて、60を過ぎて何となくそういうことなのかなって分かるようになってきた。どうでしょう。

○委員（高梨麻美）

これの、私、16ページのところの文章でさえ、「あなたとあなたの大切な人はどのように過ごしていますか」という投げかけ文があって、私、誰かと一緒に住んでいなきゃいけないという前提でこの文章は書かれているのかしらって一瞬思ったぐらいなんです。一人でもいいんじゃないかしらみたいな。あなたはどのように過ごしていますかっていうふうな投げかけじゃなくて、どうして大切な人が町の中にいるって前提の文章になるかとか、もちろん、町のメンバーを大切に思っていてほしいという町の思いは分かるんですが、「あなたはどのように過ごしていますか」でもいいんじゃないのかしらって。その町の中にいなくてもいいんじゃないかと思ったんですね。

○会長（臼井正樹）

「そして、あなたとあなたの大切な人はどのように過ごしていますか」というのは、町の中とは書いていないよね。

○委員（高梨麻美）

あなたとあなたの大切な人が一緒に過ごしているっていうふうな形、それがそうなったときに、人とつながる町というのが、葉山町の中でつながるってことはもう想定していないという文章であるってイメージですか。

○会長（臼井正樹）

必ずしも葉山町の中だけで完結する必要はないと思うんですよ。

○委員（高梨麻美）

じゃあ、「人とつながる町へ」というのは、葉山がほかの人とつながるってことを指している文章なんですか。他地域ともつながっていきますっていう。

○会長（臼井正樹）

葉山町が他地域とつながる必要があって、その人はその人にとって必要な人とつながっていればいいでしょう。

○委員（高梨麻美）

そうすると、自分らしく人とつながることを支援してくれる町なんじゃないんでしょうかみたいな。なんか自分らしく人とつながることができる町なんじゃないのかなっていう気がして、町の姿が。

○会長（臼井正樹）

あなたとあなたの大切な人、つまり、この文章は、インティメートな関係性の近い人、親しい親密な関係である人が、私、あなたにとって、その人との関係を大事にしながら、あなたはどの過ごしていますかっていう話で、それは町の中に住んでいるかどうかは関係ないと思います。

○委員（高梨麻美）

あと、まずは大切な人が必ずいなくちゃいけないっていうことになりませんか。

○会長（臼井正樹）

必ずいなきゃいけないとは言っていない。いたほうがいい。

○委員（高梨麻美）

うん、いたほうがいいのはもちろんそのとおりです。なんですが、「あなたとあなたの大切な人はどのように過ごしていますか」っていう投げかけをすることにおいて、あなたの大切な人がいる前提での文章を町がつくっているっていうふうに読み取れる気もしたんです。ここはでも自分が印象で受ただけだったのでさっきは何も言わなかったんですが、人っていうのをどのように町が置いているのが、この文章全体を読んだときに、もしも町の中の人を大切に思っているっていうメッセージがそこに入っているのか、それとも人とつながるが町の中でつながりなさいなのか、それとも外なのかとかいうところがちょっと読みづらかった。

○会長（臼井正樹）

さっきも言ったけど、例えば、亡くなった親の話でもいいわけです。今はもう亡くなっちゃったけど。でも、その人の思い出があって、町と思い出があって、それからその人が大切にしたものがあるところで生活していれば、それは、亡くなった人であっても一定のつながりがまだ継続しているっていうのも言ったと思うんですよ。だから、そういうことも含めてつながれるというふうに考えてもいいのかなと思うんだけど、そこはちょっと冷静に整理してみてください。

○委員（高梨麻美）

そういうことのなんか人とつながるを説明、もうちょっと丁寧に説明してほしいです、全体として。思いました。

○会長（臼井正樹）

ただ、自然環境との関係が薄くなってしまう可能性があるというのは事実だと思います。その

部分をどういうふうに判断するかということとの関係で、今の部分をどう整理するかだということだと思います。

○委員（高梨麻美）

はい。

○事務局（町田政策財政部長）

事務局の責任者として、今日の議論をどのように預かるかを一応確認させていただくという意味で、今日一言も発言していないので、ちょっと一言だけ。ずっと議論を聞かせていただいていたのが、今回の第五次総合計画をつくり込むに当たって、まだ案をつくる段階ですけれども、我々行政側で携わる職員としては、冒頭から申し上げているとおり、時代の流れに合わせて、第四次を否定するつもりは毛頭ございません。第四次、私もつくり込みに関わっていましたので、自分で自分を否定したくないので。第四次を踏まえて、さらにより計画をつくるということで、これもキーワードになってしまうんですけど、分かりやすく、みんなに手に取ってもらって読んでもらう計画。それが先ほどの臼井先生の言葉を借りれば、ちょっととがった計画になるのかもしれないです。

その中で今回多用しているのはやっぱりフレーズ、キーワード、メッセージ性の強いこと。今まで行政がつくる、いわゆる行政計画という切り口でいくと、なかなかそういうつくり込みはしていなかったんですけども、あえて佐野課長以下、大屋さんたちが挑戦をしてみているわけですね。新しい時代に即した計画づくりというところで案をつくった中で、やっぱり高梨さんを中心に、いろいろなこのメッセージって果たしてどういうふうに受け取るのかってなると、人によって捉え方が違うんだなというのを今日また勉強させていただきました。

ちょっと余談になっちゃうんですけど、山梨町長と会合とか行くと、いろいろ意見をもらってもう一回見直さなくちゃいけないような、我々がすごい結構ショックを受ける会議に出た後、山梨町長は「今日はいいい会議でしたね」っていうんです。私も今日すごいいい会議だったなと思っていて。やっぱり行政計画ではなくて、社会的な要素を持つ計画をつくるっていうことであれば、この第五次総合計画って、このプロセスを踏むことによって、みんなで作る計画としてみんな読んでもらうようになると思っていますので。

ひとつ御理解というかお認めいただきたいのは、時代の流れに即した新しい視点での計画。前回か前々回ぐらいに臼井先生のほうから「面白い計画になってきたね」っていうふうにおっしゃっていただいたところは、ぜひみんなで今日の時点でも共有していただいて、少し違った切り口のつくり込みにしていただくことはぜひお認めいただいているなって、今日、認識で我々帰りたいと思います。ただ、その中で、メッセージやキーワードのところがもう少し、限りある時間ですけれども、代表的なところでいくと、みんながつながらなくちゃいけない町を町は推奨するのかっていうような誤解は確かに大きな問題だなと思いますので、もう少し付言するような形、肉づけをして少しでもそういった誤解が招かないようになっていうような視点で今日話を預かって、次の会議にまた提案をさせていただきたいと思いますので、根本のところはぜひ御理解いただければと思います。よろしくお願いします。

○会長（臼井正樹）

部長にまとめていただいて、ありがとうございます。実施計画をつくらない総合計画って、そういう意味では面白い。基本計画は、つまり、基本構想・基本計画まではつくって、年度ごとに例えば予算編成の中で具体的に実施できるものをそれぞれ、4年間のスパンの中で年次割りは考えるにしてもという意味では、具体の細かな実施計画をつくらない。ただし、4年たったところで一定の基本計画についての評価は可能な範囲でしてみるという意味ではとても面白い。しかも、少し抽象度の高いところから始めて目標をつくっているというところはとてもチャレンジングだとは思いますが、そこは崩さないでさらに先へ進められればと思いますので、よろしくお願いします。

3 その他

○会長（臼井正樹）

最後のその他、お願いします。

○事務局（大屋主任）

その他、2点ございます。

まず、会議録の取扱いについてです。基本的には公開をさせていただければと思っているんですが、従前のとおり、一度こちらのほうで案を作成させていただいて、それを投げさせていただいて、御意見、加筆修正、そういったものをまた頂ければ、そちらを反映させたものを、基本的には次の審議会のタイミングでこういった形になりましたとお示しさせていただいて、御了承いただければ資料とともに公開といった流れを取れればと思っているんですが、そういう形でよろしいでしょうか。

○会長（臼井正樹）

よろしいですか。（「はい」と呼ぶ者あり）

○事務局（大屋政策課主任）

本日お渡ししているものについては、これにまたプラス何かあれば、来週ぐらいまでに頂ければとは思いますが、一旦こちらはまとまっています。今日のものについては、メール等々で一度案をつくらせていただいたものをお送りしますので、それでまた加筆修正いただければと思います。

○会長（臼井正樹）

よろしくお願いします。1点目が以上ですね。はい。2点目。

《事務局より説明》

○会長（臼井正樹）

日程調整ありがとうございました。では、次回、6月3日の午後ということで御予定いただければと思います。ありがとうございました。

ということで、15分超過になっていますが、じゃあ、今日はこのぐらいでおしまいにしたいと思います。ありがとうございました。

終 了